■日本燃焼学会創立50周年記念特集■

第29回国際燃焼シンポジウム

第七代会長　伊藤　献一

1. 概　要

2002年7月21日(日)，800人以上の参加をみたウェルカムパーティーを皮切りに7月25日(金)までの5日間，Combustion Institute主催による第29回国際燃焼シンポジウム(29th International Symposium on Combustion)が北海道札幌市において開催された．1974年，第15回シンポジウムが東京麹町都市センターで開催されて以来，じつに28年振りのアジア地域での開催である．国際燃焼シンポジウムでは毎回1,000人前後の参加者があるが，日本への旅行費用が比較的高額であることや，開催前年の2001年9月11日に発生した米国同時多発テロ事件の影響から参加者の減少も懸念された．

しかし，国内研究者の積極的な参加，維持会員企業からの甚大な支援と協力のお陰で，一般登録者数767名，学生登録者数229名，同伴者登録者数105名，総計1,101名の有料登録者数を得，当初計画どおりの規模となった．講演数は一般講演357件，ポスター講演(WIP)は445件であった．また，参加国は30ヶ国にのぼった．

日本からの参加者が最も多く392名で，開催国としての面目を保った．次いで，米国からは315名で，日米2ヶ国で全体の約3分の2を占めた．近隣の韓国，台湾からの参加が予想より多いことも特徴的であった．

シンポジウム総経費は7,650万円(Proceedingを含まない)で実施した．講演・ソシアルイベントとも計画通り実施でき，成功裡に終了した．シンポジウム終了後，国内外からその成功を祝して，感謝と賞賛のメッセージが多数寄せられた．以下に運営面からの記録を辿ってみる．

2. 日本開催の意義

第1回燃焼シンポジウムが1928年米国において開かれたあとしばらく，その開催は不定期であったが，1952年の第4回以降は隔年での開催となった．また，60年代からは米国とその他地域での交互開催が不文律となった．日本人研究者がこのシンポジウムへ参加し始めたのは第2回目以降である．国際シンポジウムは1974年第15回東京シンポ以来，日本のみならずアジアで開催されていなかった．

国際燃焼シンポジウムを真の意味で国際集会にするために，アジア地域での開催を強く望む声が，アジア地域ばかりでなく，Combustion Institute Board memberからも上がっていた．

国際燃焼シンポジウムが日本で開催された場合，国内からは400人前後の参加を見込むことができた．日本の燃焼研究発展のためにも21世紀最初の国際燃焼シンポジウムを日本で開催することは意義深いことと判断された．

このような情勢を受けて，90年代，当時の日本燃焼学会平野敏右会長を中心に日本への国際燃焼シンポジウム開催誘致活動が本格化した．

3. 日本開催決定までの経緯

1994年から1998年8月に日本開催が決定されるまでの誘致活動の経緯を以下に記す．

- 1994年11月　日本燃焼学会(平野敏右会長)理事会に於いて，国際燃焼シンポジウム誘致について検討開始．
- 1995年1月　理事会に於いて，第28回国際燃焼シンポジウム誘致を決定，会場選定委員会(委員長廣安博之広大教授)が設置された．
- 同年2月　札幌を第一候補に決定．
- 同年6月　理事会に於いて誘致委員会(委員長平野敏右会長)の設置を決定．
- 同年11月　シンポジウム提案書検討．
- 同年12月　Site Committeeに札幌開催を正式提出．
- 1996年1月　平野敏右委員長，開催候補地札幌の会場・宿泊・交通施設などを視察．
- 同年7月　第26回ナポリシンポジウムBoard Meetingにおいて，平野敏右委員長，佐藤順一(IHI)，伊藤献一(北大)により札幌開催のプレゼンテーション．結果は，エジンバラに決定．誘致委員会ではただちに，2002年第29回シンポジウムに再度立候補を決定．
- 同年11月　理事会にて札幌再誘致が決定．
- 1998年3月　シンポジウム会場に予定していたテルメインターナショナルホテルが倒産したため，代替案として北海道大学を主会場とする案を作成．
- 1998年4月　新岡嵩会長は，第29回国際燃焼シンポジウム提案書提出を正式に決定，提案書改訂作業を進める．Combustion Institute副会長R. F. Sawyer氏の現地視察も行われ，好感触を得た．
- 1998年8月　第27回国際燃焼シンポジウム(ボルダー)

の Board Meeting に於いて伊藤誘致委員 (北大) よりプレゼンテーションが行われた．日本側提案は受け入れられ，対立候補もなく満場一致で第 29 回シンポジウムの札幌開催が決定された．

4. 国内の開催地選定過程

日本へのシンポジウム誘致に際し，まず日本国内での開催地選定が行われた．気候の関係から，関西・九州方面は候補地としないこととし，東京・仙台・札幌の三都市について開催期間中の気候を湿度・気温の統計も参考に討議した結果，札幌が第一候補に決定された．

札幌は北海道の政治･経済，文化，科学そして産業の中心地であり，札幌とその近郊には歴史的建造物やアイヌのコタン，博物館，ビール製造場，ワイナリーなどの興味深い場所や美しい山と湖が遍在している．同伴者にもこれらの場所で北海道をゆったりと楽しめると考えた．また，北大を中心に実働部隊の編成が容易であること，利用施設の規模，経費，利便性も加味された．

5. 実行委員会

5.1 実行委員会組織

1998 年，理事会に於いて伊藤献一理事が実行委員長となって開催準備を進めることになり，第 36 回燃焼シンポジウム総会の席で 2002 年開催が正式にアナウンスされた．2000 年始め，国内正式名称を「第 29 回国際燃焼シンポジウム」とした．主催 Combustion Institute，組織運営は日本燃焼学会 (Combustion Institute 日本支部) である．同時に第 29 回国際燃焼シンポジウム実行委員会を立ち上げた．第一段階として，実行委員は日本燃焼学会理事ほか 25 名，開催地実行委員 12 名，事務局 4 名で発足した．開催地実行委員会は，北海道大学および北海道内各大学から選出した現地での実働メンバーである．事務局は北大伊藤研究室に置いた．

同年 3 月末には，国内研究者のより広範な支援を得るため，燃焼学会会員の中からさらに 44 名へ委員を委嘱，学会維持会員の企業および国立研究機関からも各々 1 ～ 2 名の実行委員の選出を依頼し組織強化を図るとともに，シンポジウムへの意見の反映の場とした．

組織としては，実行委員・開催地実行委員・事務局を併せたものを総合的な実行委員会とした．実行委会幹事会は，燃焼学会理事ほか 4 名の理事経験者を以て構成した．日本燃焼学会理事会開催に併せて実行委員幹事会を開催した．実際の会議は通例の理事会後，実行委員会幹事会での討議という形でほぼ年に 3 度開催された．実行委員会は基本的に e-mail による電子会議形式とした．実行委員会の組織は，数度の改編の後，最終的に以下のように確定した．

アドバイザー　平野敏右 (消防研)，新岡嵩 (東北大)，河野通方 (東大)，委員長　伊藤献一 (北大)，幹事 33 名，実行委員 71 名，計 104 名 (内訳：企業 27 社，大学・国立研究所 52 機関)．開催地実行委員 16 名 (北海道地区)．事務局 4 名 (北大).

5.2 実行委員会幹事会

実行委員会に幹事会を設け，さらに小委員会を設置し役割分担を図った．実行委員会幹事会は第 1 回 (2000 年 7 月 8 日) からシンポジウム開催直前まで計 6 回開催した．

小委員会の担当と用務分担は以下の通り．

総務委員会　角田敏一
財務委員会　徳本恒徳　鈴木富雄　佐藤順一
プログラム編成委員会　香月正司　高木靖雄
広報委員会　塩路昌宏　毛笠明志　小林秀昭
接遇委員会　佐藤順一
展示委員会　宮内敏雄　星野崇

- 総務委員会　　作業工程表の作成および準備状況の把握
- 財務委員会　　国内参加者の促進確保，次世代調査研究会の参加企業確保，その他の財源確保，展示会参加促進
- プログラム編成委員会　　講演室 7 室態勢に伴うセッション編成対応，plenary lecture，invited lecture，session chair 等日本案策定，WIP のコマ割り・レイアウト
- 広報委員会　　国内論文応募の促進，WIP 応募の促進，国際参加者勧誘
- 接遇委員会　　Board member への対応，ソシアルイベントの内容検討，名誉会員および維持会員への対応
- 展示委員会　　展示要項の策定，展示参加企業の勧誘

第 2 回 (2000 年 11 月 28 日) 会場変更に伴い，2000 年当初に提出した予算案に改訂が加えられ，承認された．

第 3 回 (2001 年 1 月 27 日) セッションの形態変更 (採択論文の全てが口頭発表になったこと) による講演室の変更，予算の変更等を含む実行計画案が確認された．

2001 年 3 月新会場案・予算案によるシンポジウム要綱を Combustion Institute Board Meeting にて新岡嵩教授が説明，Board からの承認を得た．

第 4 回 (2001 年 7 月 7 日) 同年 6 月ソウルにて開催された ASPACC の席上，Combustion Institute 会長 Prof. Law および副会長 Prof. Haynes と日本側スタッフとの間で予算編成等の討議の場がもたれた．それを反映した第 10 次予算案が承認され，登録料およびソシアルイベントの参加料等もこの時提示，承認された．

第 5 回 (2002 年 1 月 26 日)　開催地実行委員会作業内容の確認．

第 6 回 (2002 年 6 月 14-15 日) 実行委員会幹事現地視察・打合せ．幹事 14 名が現地で最終打ち合わせ．

5.3 開催地実行委員会

開催地実行委員会は北海道大学スタッフを中心に，道内

主要大学の燃焼関連研究者 23 名および事務局 4 名で構成され，2000 年 4 月の第 1 回委員会以降，述べ 14 回にわたり委員会および作業部会を開催した．担当を以下のように割り振った．

総務－藤田修 持田明野
登録・受付・宿泊－早坂洋史
会場－小川英之
行事－永田晴紀 黒田明慈 持田明野
広報－多賀未保
経理－近久武美
事務局－山根清隆 持田明野 戸谷剛 多賀未保

開催地実行委員会の主な業務記録を以下に記す．

a) 学内施設の再検討，講演会場候補の確定，ポスター会場の選定作業，ホテル講演会場の検討を行い，その結果に従い会場使用計画表の修正版，日程計画，業務進行予定表，学内実行委員組織図を作成．

b) 委託業者 (EC インターナショナル，近畿日本ツーリスト，北大生協) との打ち合わせ．

c) Prof. C. K. Law を迎えての会場視察・市内視察，打合せ(2000 年 7 月 12 - 14 日)．

d) エジンバラシンポジウム Board Meeting での作業報告書作成の打合せおよびエジンバラでの情報収集打合せ．

e) エジンバラ Board Meeting の結果を受け，ホテルを主会場とする会場案を策定．また，それに沿う予算案を策定．

f) 2000 年 11 月，平野敏右教授，新岡嵩教授，角田敏一教授が札幌入り．新案が了解される．

g) 2001 年 6 月 28－30 日 Combustion Institute 副会長，Prof. B. Haynes を迎えて予算組の詳細案を策定．

h) 2001 年 9 月－10 月 京王プラザホテル，隣接するホテルポールスターの 2 施設を使用する実行案を作成．

i) 2001 年 12 月 各ホームページ作成進捗状況，会場配置プランの説明，コンフェレンスバッグ見本披露，各ソシアルイベント細目検討等作業日程の確認．

j) 2002 年 4 月 登録料の学生補助，改訂予算案作成，本部 WIP プログラム委員会との打合せ，on line 登録最終確認，受付時の態勢・手順，同伴者プログラムの詳細，会場講演室以外の部屋の準備状況，ソシアルイベント会場との連携確認，会場・機器設営の細目，会場への交通手段案内等．on line 受付開始，旅行関連ホームページオープン．

k) 2002 年 5 月 スタッフマニュアル(55 頁) 作成，看板関係細目取り決め，講演室のプレゼンテーション機器細目検討等，各項目最終確認．

l) 2002 年 6 月 各作業部会の作業状況報告，未作業項目の確認，作業予定の詳細な日程確認．

m) 2002 年 7 月 12 日 登録者数等確認．講演およびソシアルイベントの実行手順を最終確認．

6. 会場選定

6.1 講演会場

当初案は北大キャンパスを会場とするものであったが，2000 年 10 月，北海道大学工学部が 2002 年に大規模改修工事を行うという情報が入り，大学利用案は事実上不可能となった．開催地実行委員会では，京王プラザホテル札幌を主会場とし，隣接するホテルポールスター札幌を副会場とする案を策定．日本燃焼学会理事会および Law 会長からの了解を得，最終案として確定した．

2001 年 10 月，Combustion Institute より，水曜日の contributed poster session を取りやめ，他の日と同様 oral session で構成するとの連絡があり，講演室が 6 室から 7 室へ変更された．会場の変更案については，2002 年 1 月の実行委員会幹事会で承認され，Combustion Institute に於いても同年 3 月，新岡嵩教授より説明がされ承認された．

主会場 京王プラザホテル札幌
登録受付，オープニングセレモニー，特別・基調講演，講演室 4 室，WIP，企業展示，editorial room，コピー室，スタッフ控え室，VIP 室，インターネット室
副会場 ホテルポールスター札幌 講演室 3 室

6.2 ソシアルイベント会場

ソシアルイベント会場については，数種類立案し，開催地実行委員会により討議を重ね決定した．特に水曜日のピクニックは多数の参加者が見込まれ，夏期休暇を兼ねて家族を同伴する参加者の満足を得るため，エジンバラシンポジウム後にその参加者から寄せられた意見をもとに，会場そのものだけでなく，遊具および食事の質と量，配膳の手際，アトラクション等について，入念な検討を行った．

幸い，札幌近郊には雄大な自然を生かした国立公園や，馬産地を控えた牧場，明治時代からの歴史的建造物を擁した観光地などが数多くあるため，会場の選択肢に不足することはなかったが，よりよい会場を選択するために当年まで協議を重ね実施案を策定した．

ウェルカムパーティー：京王プラザホテル札幌
コンサート：札幌コンサートホール KITARA(琴・尺八演奏)
ピクニック：ノーザンホースパーク (千歳市郊外)
バンケット：京王プラザホテル札幌
フェアウェルパーティ：北海道大学工学部前庭

7. 予算・決算

予算の策定に関しては，誘致から実施までの間，状況の変化に伴い変更・調整の繰り返しを余儀なくされた．特に，円・ドル両立ての予算を考える場合，為替変動の影響が大きいが，この点に関して予想がつきにくく難航した．

また，論文集 (Proceeding) の取り扱いに関しても，主催が Combustion Institute であり，発送・決算は本部取り扱いであるにも拘わらず，受注および実際の金銭授受は開催地が受け持つという二重構造が本部より要求されたため，これも処理に若干の時間と手数を要した．開催直前まで本部との調整を必要とした案件であった．

しかし，一番影響が大きかったのは，会場案の変遷である．大学キャンパス案からホテル案へ変更され，予算案の大幅な見直しが要求された．また，開催半年前に講演室が 1 室増え，それに伴い会場費が増加する結果となった．

幸い，参加者数が 1,000 人を超えたこと，日本燃焼学会において 2001 年から発足した「次世代燃焼基盤技術に関する国際動向調査研究会」による支援 (2,780 万円) 等のため収入が確保され，結果として収入合計 8,022 万円，支出合計 7,651 万円で 371 万円の黒字決算であった．

8. 広報

8.1 ポスター

ポスターは，全紙・A2 ・A4 各サイズを作成し，関係集会会場で配布した．参加者に強い印象を与えるようなポスターデザインとするため，札幌および東京のデザイナーに候補作を 40 点以上提出して貰い，その中からデザインを決定した．日本語題字は毎日新聞書道展審査員である札幌在住の島田無響氏に依頼した．ポスター制作は神田工房 (東京)．A4 版パンフ 2,400 枚 (国内用) および A2 版ポスター 2,500 枚．全紙のポスター 200 枚を印刷した．エジンバラシンポジウム期間中に，ポスター 1,100 枚を Board member および一般参加者に配布した．ポスターは，2000 年以降，多くの人の目に触れることになり，シンポジウム史上初めて Proceedings のカバーデザインに使用されることにもなった．

8.2 インターネットホームページ

会告，登録，旅行・宿泊案内等の HP を用意した．概要・登録に関しては登録業務を請け負った EC インターナショナルが HP を作成し，旅行・宿泊に関しては近畿日本ツーリストが作成・管理した．

リンク先：Combustion Institute，日本燃焼学会，北海道公式 HP，札幌市 HP，新千歳空港 HP，JR 北海道 HP，カナダの Clean Combustion Network イベントカレンダー，KITARA 等．

9. 業務委託

1998 年シンポジウム開催が決定した直後から，業者の実績・計画書サンプルを検討し，最終的に，以下のように各業務の委託業者を決定した．

・ECインターナショナル (札幌)

i) 事前登録受付 (on line 主体) ii) 入金処理業務
iii) ビザ申請業務　iv) 当日の登録・受付業務
v) 登録時配布用の参加者リスト，ガイドブック (カラー 57 頁)，イベントチケット，ネームタグの作成

・近畿日本ツーリスト (札幌)

i) 宿泊受付　京王プラザホテル札幌はじめ札幌 JR 駅近辺など札幌市街地のホテル 20 軒程度を斡旋．
ii) 同伴者ツアー　1 日または半日ツアーのプログラム
iii) シンポジウム前後の国内ツアー
・1 日ツアー (小樽・洞爺湖・定山渓・札幌市内) 170 名参加
・ポストシンポジウムツアー 関東方面 10 名参加

・札幌市国際プラザ

着付けなど日本文化体験を盛り込んだ半日ツアーが国際プラザを通して手配された英語ボランティアの方々のご協力で実施された．1 週間でのべ 284 名がこの半日ツアーに参加した．もっとも人気があったのはやはり日本文化体験コースであった．

英語ボランティアスタッフには，初日・2 日目と学生アルバイトとともに，英語表記が十分とはいえない新千歳空港で海外からの参加者の案内業務にあたった．

・one way ツアー (藻岩山コース，大通り散策等) 21 名参加
・1 日日本文化体験 (着物着付け等) 36 名参加
・半日ツアー (北大キャンパス散策，中央市場巡り) 57 名参加

・北大生協

機器設営等：oral session に必要なコンピュータを 15 台 (予備を含む)，北大の関係研究室所属の学生から借り上げる形でまかなった．その他，各配線・音響等設備等は北大生協，(株) プリズム (講演会場投影機材・インターネット)，(有) 工作倉庫 (パネル，看板，表示板) に委託した．各講演会場には，プロジェクター 1 台，OHP 2 台 (講演用と案内用)，スクリーン 2 枚 (講演用と案内用)，レーザポインター，タイマー，ワイヤレスマイク 2 本，マイク 4 ～ 8 本が用意された．講演準備室は 2 つのホテルに 1 部屋ずつ用意したが，それぞれ，プロジェクター，OHP を各 2 台ずつ用意した．

論文コピーサービス：外国人留学生 2 名ほかが常時対応にあたった．

フェアウェルパーティ：設営およびケータリング

・その他の業務委託先および提供品

経理：成田明税理士事務所　(札幌)

ストリーミング配信：(有) ライフクリエイティブリサーチ (札幌)．インターネットを利用したライブ中継を実施し，初日から 3 日目までに世界で 600 件のアクセスが記録された．

ドリンクサービス：会場ホテルへ委託．各会場でコーヒー，ウーロン茶，ジュース，水をサービス提供した．

コングレスバッグ：参加者全員へ配布するコングレスバッグについては，2001 年末から 2002 年初めにかけてスポンサーを募ったが，応募がなく北大のみがスポンサーとなった．品質と価格で中国製とすることに決定，2002 年 2 月末，1,200 個を発注．

イベントウェア類：Tシャツ・キャップを制作販売した．Tシャツはグッズとして販売したほか，学生アルバイトスタッフが着用し，参加者にスタッフであることが分かりやすいようにした．また，実行委員は薄手の白いブルゾンを会期中着用した．

その他の頒布品：シンポジウムの文字を入れた富士山柄のマウスパッド(輪島漆器販売 (株))，バンケットで提供されたシンポジウムの文字入り日本酒 (小林酒造・北斗随想) がある．

10. シンポジウムの記録

10.1 Opening Ceremony

7 月 22 日 8 時 30 分から京王プラザホテル・エミネンスホールで Opening Ceremony が行われた．会場は 830 人を収容し，伊藤実行委員長が開会挨拶を述べ，つづいて中村陸男北海道大学総長から歓迎の挨拶と祝辞を戴いた．日本燃焼学会河野通方会長および Combsution Institute Prof. C. K. Law 会長よりそれぞれ挨拶が述べられた．Prof. J. Troe プログラム委員長からシンポジウムの全体説明があり 9 時に式典を閉じた．

10.2 Hottel Lecture, Plenary Session

Opening に引き続き，Prof. F. A. Willams から Hottel Lecture の講師紹介があり，Prof. Sébastien Candel が登壇した．Combustion Dynamics and Control: Progress and Challenges と題するもので，解析結果をビジュアルに表現し印象的な分かり易い講演であった．

Plenary Lecture は火曜から金曜まで毎日朝 8 時 30 分から行われた．23 日は Albert F. Wagner: The Challenges of Combustion for Chemical Theory，24 日は平野先生による Combustion Science for Safety, 25 日は Gregory I. Sivashinsky: Some Developments in Premixed Combustion Modeling，26 日は Klaus R.G. Hein: New Challenges for Research in a Changing Energy Market であった．

10.3 Oral Session

Oral Session は 7 室に分かれて行われた．1 日あたり各室 11 −12 講演 (水曜は 5 講演) であった．合計 357 講演 (コマ数換算) が行われた．日本からの論文は応募 157 編，採択 51 編で例年より 20 編も多かった．米国からは 164 編の発表であった．分野別では乱流 50，層流 44，推薬 32，固体 32，内燃機関 28，反応 25，新燃焼 24，火災 22，合成・触媒 19，計測 18，微小重力 17，液滴・噴霧 15，デトネーション 12，炉 10 であった．

10.4 WIP

WIP(Work in Progress) はポスター講演で水曜を除く毎日入れ替えで開かれた．2 室にそれぞれ約 60 講演が行われ合計 445 編の発表があった．

10.5 ソシアルイベント

・ウェルカムパーティ

ウェルカムパーティーは 7 月 21 日 (日)，京王プラザホテル・エミネンスホールにて，17:30 ～ 19:30 を予定して立食形式で行われた．800 人を超える人々に満足いただけるだけの飲食物とエミネンスホールの明るく和やかな雰囲気，ホテルスタッフの行き届いたサービスにより大盛況であった．事前登録者 825 名 (内子供 20 名)．

・コンサート

コンサートは 23 日 (火)，札幌コンサートホール KITARA 小ホールにおいて，邦楽の演奏会を企画した．丸田美紀・田中孝一郎による箏曲および福田輝久による尺八演奏は，海外からの参加者にはもちろんのことであるが，日本人参加者にとっても，日頃あまり馴染みのある音楽ではなく，新鮮な印象をもたらした．ホールホワイエに参加者が自由につま弾けるように箏を置き，コンサートチケットにワンドリンクをつけるなどのサービスは好評であった．

また，コンサート会場は最寄り地下鉄駅から徒歩で 7 分程度かかる場所にあるため，要所に学生アルバイトを配置し道標とした．会場までの送迎バスこそ出さなかったものの，会場までの移動はスムースであった．事前登録者 368 名 (内子供 3 名)．

・ピクニック

ピクニックはシンポジウムの中日，24 日 (水) に行われた．この日，講演は午前中のプログラムのみで，午後からはバスにより札幌からほぼ 1 時間の距離にあるノーザンホースパークへ向かった．残念なことに出掛けはやや雨模様であった．

バスに実行委員が各 1 ～ 2 名ずつ分乗し，ノーザンホースパークでの遊具の説明や，入園に際しての注意事項等の印刷物を配布，さらに口頭で参加者へ説明した．幸いなことに，雨はピクニックサイトに到着する頃には小降りになっており，野外での遊びを妨げるほどではなく，参加者は，二階建て馬車やレンタル自転車，テニスにパークゴルフ，バルーンアーチェリーや引き馬などを楽しむことができた．

屋内では陶器の絵付けコーナーや，日本中央競馬の過去

レースをビデオ鑑賞できるスペースもあった．食事は屋内でのバーベキューで，雨の影響を受けることなく，北海道の海・山の食材を使った豪快な焼き物とワインが饗された．バーベキュー後に行われたソプラノ歌手 竹田有輝子(藤原歌劇団所属) による小コンサート，そして各国代表による合唱大会は，開催地実行委員イベント担当永田助教授の絶妙な司会も相俟って大変な盛り上がりをみせ 8 時半過ぎまでつづきアットホームな雰囲気を楽しんだ．事前登録者 562 名(内子供 11 名)．

・バンケット

Combustion Institute による表彰式等も執り行わるバンケットは，25 日(木) 19 時 30 分より京王プラザホテル・エミネンスホールを会場に，ラウンドテーブルで行われた．全体で 3 時間のバンケットを時間配分よく料理が出された．コースは和食を中心としたメニューで，欧米からの参加者も大多数が器用に箸を使いこなし，普段と違う珍しい味と食感を堪能していた．要所では英語による解説ナレーションがあった．

宴の中ごろ，恒例の表彰式が行われた．Lewis ゴールドメダルは F. C. Lockwood，Egerton ゴールドメダルは B.T. Zinn が受賞した．Zeldovich ゴールドメダルは新岡先生から N. Peters に授与された．続いて，日本の音，津軽三味線の演奏が新田弘志・昌弘親子によって披露された．津軽じょんがらといった純粋な津軽三味線曲から欧米の参加者にも馴染みのあるベンチャーズまで，リズム感あふれる幅広い演奏であった．また，辻，平野，竹野 3 先生が壇上に呼ばれ乾杯する和やかな場面もあった．

広い会場ではあったが，前面舞台近くにスクリーンを張り，壇上の様子を中継し，後方のテーブルにも表彰式や三味線の撥捌きがよく見えた．事前登録者 548 名 (内子供 4 名)．

・フェアウェルパーティ

会場は京王プラザホテルから歩いて 15 分程の北海道大学工学部前庭である．実行委員会では，送迎バスを出し参加者の便を図るとともに，コンサートの時と同様に，学生アルバイトを道標として要所に配置し，参加者をサポートした．学生アルバイトの順路指示は態度も良く，参加者に好印象を与えていた．

このイベントのサービスは北大生協であったが，飲食物に関して若干不足の感が否めなかったのが残念である．この日もやや雨模様であったのだが，フェアウェルパーティは無事行われ，閉幕を惜しみ，話の尽きない参加者たちは杯を傾けあい続けていた．

6 日間，京王プラザホテルロビーに灯されていた国際燃焼シンポジウムの聖火ともいえる「炎」もパーティ会場に移され，世界各国から参集した者同士最後の宵と会期中の思い出，シンポジウムの成功を照らしていた．事前登録者 746 名(子供 23 名)．

10.6 機器展示

機器展示 (6 社)：西華産業 (株)・(株) ナックイメージテクノロジー・(株) フォトロン・(株) アイ・アール・システム・(有) マサミ化学・Elsevier Science

資料配付 (8 社) ：(株)神戸製鋼所　環境エンジニアリングセンター・中外炉工業・三浦工業 (株)・(株) 溝尻光学工業所・リンナイ (株)・丸文 (株)・Taylor and Francis・Institute of Physics Publishing

10.7 実働人員

開催期間中，実際に開催地での仕事を担当した実行委員会の人数は，実行委員幹事 29 名，実行委員 40 名，開催地実行委員 16 名，事務局 4 名，学生アルバイト 39 名のべ 211 名，ボランティアのべ 31 名であった．

11. おわりに

今回の国際燃焼シンポジウムは参加者数の予測の難しさや会場をホテルのみにせざるを得なかったことなどから，財政的に厳しいことが予想された．そのため，全国の実行委員のみなさまにはご負担も大きかったことと思われるが，方々の惜しみないご助力，そして，燃焼研究分野に携わる研究者および産業界の熱心な支援と尽力により 1,000 人を超える参加者を得，かつ参加者の方々にご満足いただけた．

2002 年第 29 回国際シンポから早 3 年半が経ち，当時の膨大な資料を眺めると感無量である．シンポジウム運営は小生が北大在職最終年度の仕事であり，最初の開催地として指名を受けてから 7 年にわたり多くの燃焼学会会員・役員の皆様，実行委員および幹事の諸氏に支えて頂き，加えて北大の関連研究室の職員・学生全員の筆舌に尽くしがたい献身的協力を得て成功裡に開催できたことを，あらためて感謝申し上げる次第です．

・・・・・・・・・・・・

Combustion Institute 会長 Prof. C. K. Law および 2000 年第 28 回シンポジウム開催地実行委員長 Prof. D. Smith からの祝辞をもって，この報告を終わりたい．

この賛辞は，シンポジウム開催にご尽力いただいたすべての方々に贈られたものである．

Dear Professor Ito:

I would like to congratulate you and your colleagues in the Local Arrangement Committee for a splendid symposium that you have organized. Ever since the Sunday reception, I have heard nothing but praise about how well the symposium was organized. Everything went smoothly, with thoughtfulness and class, and everybody was happy.

On behalf of the Combustion Institute, I thank you deeply for a job superbly done. Please also convey my gratitude and congratulations to all members of the Local Arrangement

Committee.
Cheers.

Chung K. Law
President, The Combustion Institute

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Professor Ito

I would like to add my thanks and congratulations to those of Chris Lawn, on the excellent combustion symposium you arranged for us in Sapporo.

From my work on the Edinburgh meeting, I know only too well how much time and energy it takes to organise a meeting on this scale. This also puts me in a position to judge what a very good job you and your colleagues did. I cannot remember a symposium that was better organised and run. The Institute owes you a large debt of gratitude.

Regards,

David Smith

実行委員名簿　所属は2002年7月現在

・アドバイザー

平野敏右（消防研），新岡嵩（東北大），河野通方（東大）

・実行委員会幹事

伊藤献一（北大）小豆畑茂（日立）石塚悟（広大）伊東輝行（日産）稲田満（三重）梅村章（名大）大澤克之（豊田中研）大屋正明（産技研）岡崎健（東工大）香月正司（阪大）角田敏一（大阪府立大）川口修（慶大）神原信二（出光）毛笠明志（大ガス）幸田清一郎（東大）越光男（東大）小林秀昭（東北大）斎藤直（消防研）佐藤順一（IHI）佐藤幹夫（電力中研）佐野妙子（東海大）塩路昌宏（京大）鈴木富男（神鋼）高城敏美（阪大）竹野忠夫（名城大）徳本恒徳（東ガス）萩原明房（東電）藤宗篤雄（日石三菱）星野崇（クリーン燃焼）堀守雄（拓殖大）溝本雅彦（慶大）宮内敏雄（東工大）村瀬英一（九大）若井和憲（岐阜大）

・実行委員

青木清（日大）安里勝雄（岐阜大）阿部芳和（コロナ）新井雅隆（群大）飯田訓正（慶大）石川善弘（リンナイ）稲村隆夫（弘大）猪俣忠昭（上智大）今田守彦（中外炉）植田利久（慶大）氏家康成（日大）大岩紀生（名工大）太田安彦（名工大）大八木重治（埼玉大）岡島敏（法大）岡田博（東京商船大）小沼義昭（豊橋技科大）小野信輔（北九州市立大）片岡龍次（富士重工）岸本健（国士舘大）北野三千雄（岩手大）城戸裕之（九大）佐宗祐子（消防研究所）定方正毅（東大）佐藤研二（東邦大）志賀聖一（群馬大）清水里欧（トヨタ自動車）鈴木康一（東京理科大）鈴木鐸士（茨城大）鈴木豊彦（鳥取大）瀬川大資（大阪府立大）大聖泰弘（早大）高木靖雄（武蔵工大）滝史郎（広大）竹村正（川重）田村守淑（東邦ガス）津江光洋（東大）坪井孝夫（横浜国大）鶴田俊（消防研）土橋律（東大）冨田栄二（岡山大）中川淳一（新日鐵）中島健（神戸大）成川公史（中部電力）成瀬一郎（豊橋技科大）西岡牧人（筑波大）西田惠哉（広大）二宮徹（電力中研）野村伸一郎（バブコック日立）長谷川敏明（日本ファーネス工業）濱純（産技研）林光一（青山学院大）林茂（航技研）平野順也（高木産業）藤本元（同志社大）堀政彦（日本自動車研）牧野敦（静岡大）丸田薫（東北大）升谷五郎（東北大）松村昌彦（大ガス）三浦隆利（東北大）三上真人（山口大）三谷徹（航技研）宮阪憲治（福井大）宮田和男（省エネルギーセンター）宮前茂広（IHI）矢野利明（鹿児島大）山崎博司（愛媛大）湯浅三郎（都立科技大）吉澤善男（東工大）吉田亮（東京電機大）若狭暁（三浦研究所）

・開催地実行委員

工藤勲（北大）工藤一彦（北大）宮本登（北大）菱沼孝夫（北大）永田晴紀（北大）黒田明慈（北大）小川英之（北大）近久武美（北大）早坂洋史（北海道大学）藤田修（北大）常本秀幸（北見工大）佐々木正史（北見工大）新井隆景（室工大）谷口博（北海学園大）酒井章史（JAMIC）池上真志樹（産技研）

・事務局

山根清隆（北大）持田明野（北大）戸谷剛（北大）多賀未保（北大）